

訪問！島から生まれた新商品&新サービス

中小企業の成長や課題解決をサポートする中小機構では、離島地域の事業者も支援している。
中小機構の支援を受けて誕生した島々の新商品&新サービスと、それらを生み出した人々の想いに迫るべく2つの島を訪れた。

きたぎしま
北木島／岡山

だいこんしま
大根島／島根

歴史ある「石の島」で生まれた 生きた産業を観る観光とは？

瀬戸内海には石材で栄えた島がいくつも。なかでも北木島の「北木石」は、靖国神社の大鳥居や日本銀行本館などの建造物にも使われてきた銘石として知られている。この島で「石の島」を体験する観光メニューが生まれていると聞き、キーマンである鶴田康範さんに話を聞いた。

島の採石業は斜陽傾向にあり、最盛期に127あった島の採石場も今は2カ所になっている。「この現実を見つめたうえで、石切り文化を含めて、石材ビジネスをどう守っていくか。我々には石材産業を守っていくゆるぎない信念がありますけど、やはり成長産業に乗っかるような形で守っていく方法を探したい」。

そこで鶴田さんは観光に舵を切るが、石材産業で栄えた北木島には観光のノウハウが少なかった。「我々はただの石屋ですから観光は不慣れです。そこで中小機構の支援を受けながら地域資源活用認定事業に申請することにしました。同事業に認定されれば、さまざまな支援が受けられるため、島内の石材加工会社や笠岡市内の観光会社、船会社の4社連携で同事業にチャレンジ。5年間のサポートがスタートし、鶴田さんは自社の採石場に展望台を設置した。

海辺の集落から坂道を上った先にある採石場の展望台から、巨大な穴に刻まれた石切りの歴史に思いを馳せると、

味わい深い感動が湧き上がってきた。

島内を巡る産業観光ツアーには、2時間のガイドツアーもあり、展望台はもちろん、2015年に復活した島の映画館での歴史映像鑑賞や、採石場や加工場巡りに、ゲンノウ(金槌)を使った石割体験、石の島で歌われてきた「石切唄」などを、たっぷり楽しむことができる。

「『すごかった』『びっくりした』という声をいただくことが多くてとてもうれしいです。なかでも『感動したから家のお墓をこの石でつくりたい』というお客さんがいて、実際にお墓をつくらせてもらったことがあり、これはやっぱり石屋としてうれしかったですね」。観光が石材ビジネスにつながった出来事を振り返り、鶴田さんは笑顔をみせる。

「外から来た人は(島の風景を見て)喜んで写真を撮っています。我々の展望台だけではただの絶叫スポットになって一回で終わるので、いろんな場所と連携していきたい」。実際に、地元の漁師や他地域との連携も進めているという。「北木島だけでは食べる場所や泊まる場所が限られますから、近隣エリアと連携していきたい。軒の浦には立派な旅館がありますし、同じ日本遺産になっている小豆島や本島、さぬき広島とも連携して瀬戸内の魅力をつないで立体的に伝えていきたいですね」と夢は膨らんでいる。



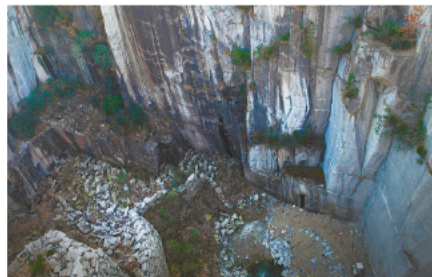
瀬戸内海らしい多島美に囲まれる北木島は7つの有人島からなる笠岡諸島の1島。フェリーや海上タクシーなどに乗り本土側の伏越港から20～60分まで到着する



創業1892年の鶴田石材4代目を継ぐ鶴田さんは「採石場には(産業を)命を懸けて守ってきた歴代の親方や職人さんたちの思いが、山肌に刻まれているんです」と語る



まるで宙に浮いているような感覚になる鶴田石材の展望台(中央)。12時から13時までは土日祝日を含め予約なしで見学することができる



明治時代から続く鶴田石材の採石場。石の島を味わう産業観光ツアーでは、こうした採石場や加工場、それらの跡地などを見学しながら、石割体験などを楽しむことができる

鶴田石材株式会社
(岡山県笠岡市北木島町8703/0120-68-2120)
国内屈指の採石場を守り、「石切唄」の保全活動などにも力をいれる。展望台の入場料は大人1,000円、小学生以下は500円。公式ホームページでは「北木石の匠」によるブログも公開。https://kitagi.jp/

「石の島」の歴史や
人々が誇る魂とは？

記事全文はこちらから▶



儲かる農業をつくりたい！ 強い想いが生むユニークな商品

本州の広域が大雪に覆われた1月上旬、島根県の大根島でユニークな商品が生まれていると聞いて、島に向かった。その商品とはパクチーを原料にしたカレーにチョコレート、ソースなど。商品を生み出した豊島美紀さんに話を聞くと、そこには島の課題があった。

「今から4年程前の話ですが、大根島は耕作放棄地がすごく増えていたので、この土地に合った作物を栽培できないかと模索していました。そんな時、知り合いから『(パクチーを)作ってみたら?』と言われて、作り始めたのがきっかけなんです」。

豊かな土壌が自慢の大根島。パクチー栽培は順調に進み、パクチー料理専門店に向けた卸販売もすぐに軌道にのった。すると今度は新たな問題が起きる。春と秋に収穫期を迎えるパクチーは、天候具合で「出来過ぎてしまう」のだ。

「捨ててしまうのはもったいない」。そこで強い香りを生かしたカレーを考案し、レトルトカレー「島採れパクチーカレー」が誕生した。ここで「もっと大根島を知ってもらいたい」という思いを強めた豊島さんは、パッケージデザインに島の地図を入れて販売をスタート。中小機構が主催する相談会に参加すると、プロのパイヤーや専門家から味やパッケージだけでなく、商品のストーリーにも高評価を受けて自信をつけた。そして、今度は大根

やしいたけを使ったカレーも開発。さらに、中小機構の支援を受けながら事業計画を可視化し、豊島肥糧店から農業部門を独立させるかたちで株式会社ふぁーむ大根島を設立し、代表取締役となった。

ふぁーむ大根島の加工商品はOEM(※)で生産されるため、「一つひとつが高額になってしまう」という課題がある。豊島さんはその販路を土産物屋や雑貨店、高級スーパーなどに絞り、高付加価値商品の開発にも着手。自社の野菜や米を活用したチョコレートも製品化した。

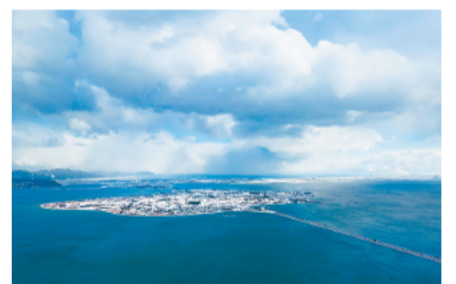
2020年2月には東京で開かれた大型展示会に初出展し、上々の反応を得るが、この直後、新型コロナウイルスの感染拡大により、商談や一部販路への卸販売がストップしてしまう。「(コロナ禍により)地域外への販路は断たれましたが、地元スーパーなどから自社で生産した野菜への引き合いは続いていたので、地元向けに自社から直販できるように作戦変更しました」。

豊島さんは昨秋、自社倉庫を改装した「島採れマーケット」をオープンさせ、自社の米・野菜・加工品のほか、島のお年寄りがつくった野菜を販売できるスペースを確保。作戦変更は野菜づくりに励む島のお年寄りたちの「生きがい」まで生み出している。

※ Original Equipment Manufacturingの略語。製造メーカーが他社(発注元)の名義やブランドの製品を製造すること



豊島肥糧店から独立したふぁーむ大根島で代表を務める豊島さん。豊島肥糧店は肥料や農業資材の販売を中心に、住宅リフォームから蜂の駆除まで住民ニーズに応える



6.7平方キロメートルの島に暮らすのはおよそ3,200人。汽水湖(※)に浮かぶ大根島までは車で渡ることができる ※ 海岸付近にあり海水の影響により多少塩分を含む塩水湖の一つ



大根島パクチーの商品群は、思わず「ジャケ買い」したくなるパッケージも特徴。中小機構の紹介で受けたメディアの専門家や大手百貨店からのアドバイスも加わっているという



「島採れマーケット」の一角。「儲かる農業の仕組み」を展望する豊島さんはこうした拠点をつくることで「一緒に島で農業をやってほしい人々を増やしたい」と願う

有限会社豊島肥糧店
(島根県松江市八束町波入510/0852-76-2643)
創業約60年。一次産業から六次産業化や観光事業まで、島の課題や価値に密着し、地域を持続可能にする事業に取り組む。パクチーカレーは各種800円(税別)。調味料やチョコレートも人気。www.farm-daikonshima.com

そんな大根島には今、
UIターン者が続々?!

記事全文はこちらから▶

